

古典の世界に親しもう —まるごと読んで古典の理解を深める—

東京学芸大学附属世田谷中学校

野中 三恵子

「古典嫌い」に悩まないため」

「中学生を古典嫌いにさせないで欲しい」これは高等学校の先生の話である。受験勉強で古典文法ばかりやってきた生徒は、古典そのものを嫌いになって高校に入学してくるという。高校で本格的に古典の楽しさを学ぶ前に、古典そのものに拒否反応を起こされては、高校の先生もさぞかし大変であろう。

では、中学校でどのような古典学習を行えば、生徒が古典に興味を持ち続けることができるのだろうか。今までの実践からアイデアを紹介する。

「まるごと」読む古典

教科書教材では代表的な古典が載っている。「竹取物語」「平家物語」「徒然草」「枕草子」「おくのほそ道」「和歌」「論語」「漢詩」等である。様々な制約から、これらはすべてその作品の極々一部しか載っていない。古典は歴史的な背景、知識などが分かって、初めて面白さが伝わってくる。そこで、「古典をまるごと読む」ことを推奨したい。

すべてというわけにもいかないが、「竹取物語」「平家物語」「おくのほそ道」などは、是非「まるごと」読ませたい作品である。

原文と全訳が書いてある本が出版社の出版社

から出ている。また、イラストや写真が豊富な資料的要素の大きい本や古典漫画なども多く出版されている。「源氏物語」を漫画で理解した方も多いのではないか。（私もその一人だ。）口語訳を読ませるのも良いし、学習漫画でも良い。「全部読んだ！」という達成感とまるごと理解したという充実感につながる。これは読書の広がりにも通じる。

中一で学習することの多い「竹取物語」では星新一訳の文庫本を読ませた。「竹取物語」は壮大な物語で、登場人物、ストーリーの展開に魅力があり、一年生でもどんどん読める。

中二、三年では「平家物語」「おくのほそ道」を、文庫本でまるごと読んだ。全文を通すことによって「白河の関」や「松島の月」にも触れることができる。

学習のまとめは、古典冒頭部分の「暗唱」だ。古典に慣れる手段になる。「Aすらすら暗唱B最後まで暗唱C途中まで暗唱」といった評価でテストするのも学習効果がある。そして何よりも教師自身が古典の学習を楽しんで、生徒とともに学ぶ主体でありたい。

のなか みえこ 東京都の公立小、附属世田谷小を経て現在の勤務校に。附属世田谷小、附属高校、大学の先生方と共に十二年間を見据えた国語教育の共同研究を行っている。